

児童教育を専攻する短期大学生の実習における困難感の調査研究 (2)

A Surveillance Study on Difficult Feelings in Teaching Practice of College Students Majoring in Child Education (part 2)

宮里 新之介*, 片平 千智**
Shinnosuke Miyazato, Chisato Katahira

*鹿児島女子短期大学 **九州大学大学院人間環境学研究院

本研究では、児童教育を専攻する短期大学生の実習において、「子ども対応困難感」「保護者対応困難感」「職員対応困難感」の具体的内容と、どれくらいの割合の学生がその対応困難を感じているかの詳細を調査することを目的とした。その結果、「子ども対応困難感」は5つのカテゴリー(47サブカテゴリー)、「保護者対応困難感」は4カテゴリー(11サブカテゴリー)、「職員対応困難」は4カテゴリー(13サブカテゴリー)が抽出された。

キーワード: 児童教育を専攻する短期大学生, 教育実習, 対応困難感

1. 問題と目的

保育者の専門性として、厚生労働省(2008)は保育所保育指針解説書の中で6つの点を挙げている。すなわち、①子どもの発達に関する専門的知識を基に子どもの育ちを見通し、その成長・発達を援助する技術、②子どもの発達過程や意欲を踏まえ、子ども自らが生活していく力を細やかに助ける生活援助の知識・技術、③保育所内外の空間や物的環境、様々な遊具や素材、自然環境や人的環境を生かし、保育の環境を構成していく技術、④子どもの経験や興味・関心を踏まえ、様々な遊びを豊かに展開していくための知識・技術、⑤子ども同士の関わりや子どもと保護者の関わりなどを見守り、その気持ちに寄り添いながら適宜必要な援助をしていく関係構築の知識・技術、⑥保護者等への相談・助言に関する知識・技術である。この中には、子どもに対応するための知識・技術の他に、保護者に対応するための知識・技術が保育者の専門性として含まれている。

また、文部科学省の幼稚園教諭の養成の在り方に関する調査研究においては、幼稚園教諭に求められる資質能力として、①幼稚園教諭として不易とされる資質能力、②新たな課題に対応できる力、③組織的・共同的に諸能力を解決する力の3つが挙げられている(一般社団法人保育教諭養成課程研究会, 2017)。この中でも幼児に対応する能力のみならず、保護者との関係を構築する力や保護者理解といった保護者に対応できる能力の重要性が指摘されている。

このように、保育士あるいは幼稚園教諭においては、子どもに対応するための専門的な知識・技術だけではなく、保護者に対応するための知識・技術も必要とされており、これらの養成課程において学生は、講義・演習などで子

どもや保護者への対応に関する専門的知識や技術について学んでいる。そして、そこで学んだことを教育実習などの現場で実際に用い、応用させ、体験的に知識と技能を習得することを目指している。

宮里(2017)は、現場での実習において、実習生が「子ども」「保護者」「職員」に対しどのような対応困難感を持つかを調査している。そこでは、「子ども」に対する対応困難として11カテゴリー(52サブカテゴリー)が抽出された一方、「保護者」に対する対応困難はわずか1カテゴリーのみであった。また「職員」に対する対応困難は2カテゴリー(5サブカテゴリー)であった。特に、「保護者」に対しての対応困難の具体的内容がほとんど得られなかった理由としては、学生へのアンケートで「実習中に「最も、困ったエピソード」1つについて自由記述で回答を求めており、それを分析対象としたため、学生の回答が「子ども」に対する対応困難のエピソードに偏ったことが考えられた。加えて、子ども対応困難のカテゴリーは多く抽出できたものの、最も困った1つのエピソードのみを回答として求めたため、得られた対応困難カテゴリーの内容についてどのくらいの割合の学生がそれらを体験しているのかという詳細までは分かっていない。

また、宮里(2017)は保護者対応困難感を実習生と現場の保育士とで比較しているが、そこでは実習生は保育士に比べて有意に保護者対応困難感が低いという結果が示され、その理由として実習ではほとんど保護者に関わる機会がないため対応困難を持つことが少ないのではないかと考察している。しかしながら、現場の保育士では保護者対応困難感が比較的高かったことを考えると、学生が実習では

十分に体験できないことが推測される保護者への対応困難について、どのような対応困難感があるのか、或いはそれにどう対応していくのかということを授業でより具体的に扱えることが必要ではないかと考えられた。

以上のことを踏まえ本研究では、宮里（2017）で抽出された「子ども対応困難感」の各カテゴリーの内、学生がどのような内容の対応困難感を実習中に体験するのかをより詳細に調査することを第1の目的とした。

また、「保護者」と「職員」についても、学生が実習中にどのような対応困難を体験するのかをより詳細に調査し、授業に活かせる資料を得ることを第2の目的とした。

2. 方法

(1) 調査の対象

X年6月上旬に児童教育学科の2年生162人に対して、幼稚園教育実習後の「実習に関するアンケート」と称した質問紙を6月下旬に配布し、任意で回答を求めた。その結果、156人から有効な回答を得た。

(2) 質問紙について

「実習に関するアンケート」では、(1) 実習で関わった幼児の年齢、(2) 各対象（子ども、保護者、職員、実習指導案・実習日誌・観察記録の描き方、その他）への主観的な対応困難感得点、(3) 実習における主観的な達成感得点、(4) 子ども対応困難感47サブカテゴリー（宮里（2017）で得られた52サブカテゴリーを精査し、47サブカテゴリーを採用した）について自分が経験した項目の選定（複数回答可）、(5) 保護者対応困難を感じた具体的エピソード（自由記述）、(6) 職員対応困難を感じた具体的エピソード（自由記述）の6項目を設けた。

なお、(2) の各対象に対する対応困難感得点は0点（全く困らなかった）～10点（非常に困った）で評価をしてもらい、また(3) の達成感得点については0点（全く達成感がない）～10点（とても達成感がある）で評価を求めた。

3. 結果

(1) 各対象への対応困難感得点

実習中における各対象（子ども、保護者、職員、実習指導案・実習日誌・観察記録の書き方、その他）への主観的な対応困難感得点を表1に示す。

「子ども」、「保護者」、「職員」、「実習指導案・実習日誌・観察記録の書き方」についての困難感の内、最も得点が高かったのは「指導案・日誌・記録の書き方」の5.83点、次いで「子ども対応困難感」の4.81点、「職員対応困難感」の3.28点、最も低いのが「保護者対応困難感」の2.21点であった。

「その他」の対応困難感について5件が挙がっていたが、具体的な内容としては「経験のない教育法への対応」「自身の仕事に関する適性への悩み」「実習先での仕事の内容」「ピアノの課題」等であった。

表1. 各対応困難感得点の平均値と標準偏差

	度数	平均値	標準偏差
子ども 対応困難感	156	4.81	2.42
保護者 対応困難感	156	2.21	2.40
職員 対応困難感	156	3.28	2.83
指導案・日誌・観察記録の書き方	156	5.83	2.72
その他の対応困難感	5	7.80	1.48

(2) 実習における達成感得点について

実習における達成感を0点（全く達成感がない）～10点（とても達成感がある）で評価を求めたところ、平均は7.64点（標準偏差1.53）となっており、全体的に高い達成感が示された。

実習での達成感得点の人数分布を図1に示す。

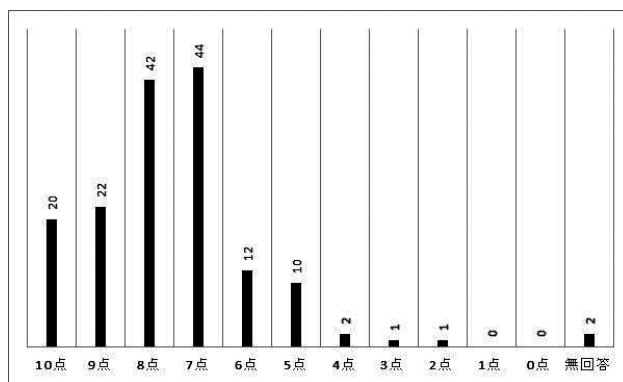


図1. 実習での達成感得点の分布

(3) 「子ども対応困難感」の内容と実習で体験した学生の件数・割合

「子ども対応困難感」の47小カテゴリーについて、どれくらいの割合の学生が体験したかを調査した結果を表2に示す。

とりわけ、「言うことを聞かない子への対応（75%）」「本当にできないのか、できるのかの見極め（58.3%）」「子ども同士の意見が合わない場面での対応（57.1%）」「ケンカの仲裁での対応（54.5%）」「気になる子へ対応したいが、同時に複数の子へ対応しなければならない場面（51.9%）」の5つについては、50%以上の学生が対応に困った経験があると回答していた。

なお、対応困難感の概要を理解しやすくするため、各小カテゴリーをKJ法により10の中カテゴリーに分け、更に5の大カテゴリーに分けた。

表2. 「子ども対応困難感」の内容と実習で体験した学生の件数及び割合

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	件数	割合
不適応の行動や 対人トラブル場面	反社会的な言動	言うことを聞かない子への対応	117	75.0%
		思い通りにいかず怒る子への対応	67	43.0%
		反抗的態度を取る子への対応	60	38.5%
		暴力的な言動への対応	40	25.6%
		仲間外れにされている子がいる場面での対応	18	11.5%
		集団で1人を標的にしている場面での対応	7	4.5%
	非社会的な言動	臆黙傾向があり先生に話さない子への対応	18	11.5%
		孤立して友だちと関われない子への対応	11	7.1%
		登園拒否をしている子への対応	2	1.3%
	食事場面での問題	食事を食べない(嫌いなものを吐き出す)子への対応	45	28.8%
	他児との衝突	ケンカの仲裁での対応	85	54.5%
		子どもの言い分が食い違う場合の対応	65	41.7%
		物を取りあう場面での対応	57	36.5%
		ケンカの理由がわからない場合の対応	55	35.3%
		他児の気持ちに気づかない子への対応	26	16.7%
		仲直りできない子への対応	12	7.7%
集団活動場面	活動への子どもの 取り組み	子ども同士の意見が合わない場面での対応	89	57.1%
		活動をしたがらない子への対応	75	48.1%
		同じペースで活動できない子への対応	72	46.2%
		思い通りにいかず泣く子への対応	58	37.2%
		活動を切り替えられない子への対応	44	28.2%
		落ち着きがない子への対応	44	28.2%
		自分でしてられない子への対応	32	20.5%
	集団全体への対応	気になる子へ対応したいが、同時に複数の子へ対応しなければならない場面	81	51.9%
		子どもによって活動ペースが違う場面	66	42.3%
		複数の子が一斉に何かを要求してきた時の対応	62	39.7%
		言う事を聞かない子の影響を他児が受けている場面	30	19.2%
		複数の子が一斉に泣きだした時の対応	10	6.4%
養育環境や 愛着の問題	家族関係に関する問題	母子分離が困難な子への対応	35	22.4%
		父親がいない子への対応	7	4.5%
		過保護な養育環境による社会経験の乏しさが疑われる子への対応	6	3.8%
		愛着の問題が疑われる子への対応	5	3.2%
		母親がいない子への対応	2	1.3%
		兄弟・姉妹間葛藤を抱えていることが疑われる子への対応	0	0.0%
発達の偏り	発達の偏り(疑い含む)	強い拘りを持つ子への対応	47	30.1%
		発達障がい児への対応	42	26.9%
		発達障がい児への他児の関わりへの対応	17	10.9%
専門職としての 自身の課題	子どもの言動の理解	本当にできないのか、できるのかの見極め	91	58.3%
		子どもがどれくらい食べられるかの見極め	72	46.2%
		泣いている理由がわからない子への対応	52	33.3%
		保育者の注意を引こうとする行動を取る子への対応	27	17.3%
		固まって無反応な子への対応	24	15.4%
		その時の気分で先生への関わりが正反対な子への対応	18	11.5%
	保育活動の 設定や進行	年齢によるできることの見極め	77	49.4%
		設定保育で緊張しうまく進行できない	71	45.5%
		設定保育で保育者の意図と異なる行動を取る子への対応	70	44.9%
		異年齢保育での活動内容の設定	24	15.4%

（４）「保護者対応困難感」の内容と件数

実習中に保護者に対して対応に困ったエピソードを自由記述で求めたところ、21人から回答が得られた。21件のエピソードを、KJ法を用いてカテゴリーを構成した。その結果、11のサブカテゴリーが抽出され、さらに4カテゴリー（「保護者とのコミュニケーションへの戸惑い」「保護

者からの要求や不満への対応」「専門職として保護者に対応する困難さ」「関わりの困難な保護者への対応」）を抽出した。

「保護者対応困難感」の内容と報告された件数を表3に示す。

表3. 「保護者対応困難感」の内容と件数

カテゴリー	サブカテゴリー	具体的エピソードの例	件数
保護者とのコミュニケーションへの戸惑い	どのような会話をすれば良いかわからない	保護者の方が子どもを迎えに来た時に、毎回、挨拶はしていたのですが、担当の先生がいないときに、保護者の方と子ども3人になったとき、何を話したら良いのかに困りました。	5
	職員だと誤解されている際の対応	B君の保護者からは実習生ではなく園の先生と間違われて話をずっとされていた時。	2
	障害を持つ親への対応	少し言葉話すことが難しい保護者があり、検尿の袋の提出日がちょうどその日で、少し理解しにくい言葉があったが、ジェスチャーで表しあって対応できた。	1
保護者からの要求や不満への対応	保護者からの要求への戸惑い	園の先生に間違われて、子どもの名前を言わず、「今日4時ごろお迎えに来るのでお願いします」と顔を見たことのない保護者に言われ、どの幼児かわからなかった。	3
	保護者に不満を表出された場面	担任の先生がバスに乗る日で、補助の先生もまだ来ていなかったで、私が子どもの受け入れをしていないことを伝えると、少し困ったような不満そうな表情をしていてどうしたらよいかわからなかった。	1
専門職として保護者に対応する困難さ	保護者の目が気になって保育に戸惑う	授業参観の際に、保護者の方がいることでなかなか子どもと関わりを持つことができませんでした。また、保護者の方々にどのように声をおかけしたら良いのかわからず、保育に消極的になってしまう場面がありました。	2
	子どものことについて保護者に上手く説明できない	日曜参観でA君はいつも以上に崩れてしまう場面が多く、クラスの皆とほとんど一緒に活動できず、泣いたり叫んだりしてしまい、補助の先生と一緒に座ったりしていました。それを見ていたA君の父親が「はあ」と観察をしていた私の横で、ため息をついていて、先生方は「普段はもう少しできているんですよ」と日頃の様子を伝えていましたが、私は何も対応できませんでした。	2
	母子分離できない子がいた際の親への対応	登園の際、クラスには私しかいない状態で、保護者の方が子どもを連れて来られた時に、子どもがなかなか保護者の方から離れずに困っており、その際、保護者の方は私に助けを求められたんですが、どのように対応したらよいのかわからなかったです。	2
関わりの困難な保護者への対応	子どもの問題を理解しない保護者への対応	給食を全く食べられない幼児や食事のマナーについて、担任と私で現状を伝えましたが、「何がいけないの?」といった状態で、伝え方や家庭のやり方にどこまで沿うのか難しいと思いました。	1
	保護者参観で活動と違うことをする保護者への対応	保護者参観でC君の母親が活動する時なのに、自撮りをC君としていて、活動が一人進んでいなかったり、話を聞いていなかったのに対応に困った。	1
	常識的でない言動への対応	話し口調や行動に困った。いつまでも土間のところに保護者が座って世間話をしたり、保育室に入ってトンボをつかまえるときに、棚に上ったりと驚いた。	1

（５）「職員対応困難感」の内容と件数

実習中に職員に対して対応に困ったエピソードを自由記述で求めたところ、30人から回答が得られた。30件のエピソードを、KJ法を用いてカテゴリーを構成した。その結果、13のサブカテゴリーが抽出され、さらに4カテゴリー

（「職員との関わり方」「指導について」「職員と自分の違いについて」「その他」）を抽出した。

「職員対応困難感」の内容と報告された件数を表4に示す。

表4. 「職員対応困難感」の内容と件数

カテゴリ	サブカテゴリ	具体的エピソードの例	件数
職員との関わり方	職員に関わるタイミングへの戸惑い	援助をする時に、分からないことや質問を何回もしてしまうと迷惑と思われると思ってどのタイミングで質問していいかわからなかった。	5
	職員の実習生に対する態度への困惑	事前訪問での先生方の対応が、挨拶をしても返って来なかったため実習前は不安であった。	2
	職員に対する言葉遣い	先生方への言葉遣いや挨拶の仕方が厳しかった。最初は戸惑ったが、自分で考えたり、他の先生に聞いたりして対応した。	2
	守秘の問題	担任の先生から、他の園で実習をしていたときのことを聞かれ、「園の様子、クラスのまとめ方、活動内容」など言っているのかわかりませんでした。	1
指導について	職員によって言うことが異なる	担任と他の先生の言っていることがバラバラな時、どれに従えば良いかわからなかった。	4
	子どもに対する関わりへの疑問・困惑	実習先の先生が完璧を求めている先生で、幼児のできていない人が目についてすぐ怒鳴っていた。実習中でも多々、そのような光景が見られ、その度に幼児は何で怒鳴られているのか、先生が起きているのか納得しえず、ただただ泣いているだけだった。その時に、自分は立って見ているだけで、何もすることができず非常に対応に困ってしまった。また、保育に参加だんどんしてと言われたが、参加すれば〇〇じゃないなど色々指摘され、自信をなくし参加することができなくなってしまった。	4
	職員からの急な要求	ピアノの楽譜を前日に渡して、「明日までに弾けるようにして下さい」と言われた時は困りました。右手だけでもなんとか弾きました。全く知らない宗教の曲だったので、事前訪問の時に言うて欲しかったです。	3
	指導されたことへの疑問・困惑	指導案の書き方について園とは違う部分があり、指摘され、どこが違うのか聞いたら自分が思うように書いてといわれ、どのように書けばいいのかわからなかった。	2
	指示がない	担任の先生は私に何も指示をしないので、毎日何をすれば良いかということを聞いていたが、あまり聞くのも良くないと思い、自分で行動しようと思ったが、どの範囲で動いていいかわかった。	1
	連絡事項が回ってこない	連絡事項が時々行き渡っていなかったみたいで、実習生まで連絡が来なかった時。	1
職員と自分の違いについて	職員との価値観の違い	未だに、男の子はこの色、女の子はこの色などをしていて、あまり好きじゃないなと思った。	2
	職員と比しての自分のできなさ	ある日の降園の際、歌を歌っている途中にA君が突然の嘔吐をしてしまい、私は少しパニックになったが、C先生はすぐ子どもたちを外へ出して、空気がこもらないよう窓を開け、判断していた。私はその時何もできずにC先生の指示に従うだけだったので、とても悔しい気持ちになった。堂々とし、子どもが不安にならないよう判断をすることの大切さを学んだ。	1
その他	その他	他の先生とは色々なお話をしたのですが、園長先生とあまりお話することができませんでした。	2

4. 考察

(1) 「子ども対応困難感」について

本研究においては、宮里 (2017) によって得られた実習における「子ども対応困難感」の具体的内容について改めて精査を行い、どれくらいの割合の学生がどのような内容について対応困難を感じるのかをより詳細に検討した。

その結果、47の小カテゴリーに整理され、それをさらに10の中カテゴリー、5の大カテゴリーとして整理した。

中でも、小カテゴリーにおける「言うことを聞かない子への対応」については75%もの学生が対応困難を感じているという結果が示された。また、「本当にできないのか、できるのかの見極め」「子ども同士の意見が合わない場面での対応」「ケンカの仲裁での対応」「気になる子へ対応したいが、同時に複数の子へ対応しなければならない場面」の4つの小カテゴリーについては、50%以上の学生が対応に困った経験があると回答していた。

これらの場面は実習において日常的に経験されるような場面であるが、このような場面に対応していくには、保育士や幼稚園教諭という視点からだけではなく、子どもの気持ちや立場に立ってみたりするような体験によってどのように対応したらいいかという視点が広がる可能性があるだろう。重橋ら (2006) は保育士・幼稚園教諭養成課程の学生を対象に、役割交換技法を用いた心理劇を行ったところ人間関係に対する気づきが促され、様々な役割を取ることで視点の広がりが促されることを指摘している。上述のような場面を設定して心理劇を用いる授業展開も学生の視点の多様さを伸ばすには有効と考えられる。

(2) 「保護者対応困難感」について

本研究においては、「子ども」「保護者」「職員」「指導案・日誌・観察記録」の4つの対応困難感の中で、保護者対応困難感は最も低いという結果となった。

保護者に対する対応困難を感じたエピソードについては、156人中21人 (13.5%) からエピソードが出された。それを分析した結果、「保護者とのコミュニケーションへの戸惑い (どのような会話をすればいいかわからない・職員だと誤解されている際の対応・障害を持つ親への対応)」「保護者からの要求や不満への対応 (保護者からの要求への戸惑い・保護者に不満を表出された場面)」「専門職として保護者に対応する困難さ (保護者の目になって保育に戸惑う・子どものことについて保護者に上手く説明できない・母子分離できない子がいた際の親への対応)」「関わりの困難な保護者への対応 (子どもの問題を理解しない保護者への対応・保護者参観で活動と違うことをする保護者への対応・常識的でない言動への対応)」の4カテゴリー (11サブカテゴリー) が抽出され、児童教育を専攻とする

短期大学生が実習で保護者に対して持つ対応困難感の内容をより具体的に把握することができた。

中でも、サブカテゴリーでみると、保護者と「どのような会話をすればいいかわからない」という困難感についてのエピソードが最も多く、次いで「保護者からの要求への戸惑い」が多かった。

総じて考えると、学生は実習先で保護者と関わる機会自体は少ないものの、1対1で関わらなければならないような場面に直面した際には、関わった機会自体が少ないが故にどう対応したら良いかに困惑し、動きにくくなってしまう傾向があるのではないかと推察された。

また、実習生とはいえ児童教育の「専門家」として実習に来ているという意識が学生にあるからこそ、専門職として保護者からどう見られ、どう評価されているのかということに過敏になりやすくなっていることも考えられる。それ故に、保護者の前では保育実践に躊躇してしまったり、子どものことについて上手く保護者に説明できなかったりといったパフォーマンスの低下が引き起こされやすいのではないかと考えられた。

今回の調査研究によって、保護者対応困難感の具体的内容のある程度把握することができたが、これらはあくまでも実習生という立場での困難感である。保育士や保育所による保護者支援の研究も現在では見られる (高橋: 2015, 片山: 2016) が、現場の職員になるとまた違った保護者対応困難感を持つことも十分考えられる。その点については今後の課題としたい。

(3) 「職員対応困難感」について

「子ども」「保護者」「職員」「指導案・日誌・観察記録」の4つの対応困難感の中で、職員対応困難感は2番目に低いという結果となった。

実習先の職員に対する対応困難を感じたエピソードについては、156人中30人 (19.2%) からエピソードが出された。それを分析した結果、「職員との関わり方 (職員に関わるタイミングへの戸惑い・職員の実習生に対する態度への困惑・職員に対する言葉遣い・守秘の問題)」「指導について (職員によって言うことが異なる・子どもに対する関わりへの疑問や困惑・職員からの急な要求・指導されたことへの疑問や困惑・指示がない・連絡事項が回ってこない)」「職員と自分の違いについて (職員との価値観の違い・職員と比しての自分のできなさ)」「その他」の4カテゴリー (13サブカテゴリー) が抽出され、実習で職員に対して持つ対応困難感の内容をおり具体的に把握することができた。

とりわけ困難感として最も多く報告されたのは、サブカテゴリーの「職員に関わるタイミングへの戸惑い」であり、

次いで「職員によって言うことが異なる」「子どもに対する関わりへの疑問・困惑」「職員からの急な要求」が比較的多かった。

結果を総じて見ると、ここにも「保護者対応困難感」の結果からうかがわれた専門職の卵としての自意識があるように思われる。すなわち、`日頃の講義や演習等で学んだことを実習で実践し、自分で考えて動こうとする意識、を持つ一方で、とはいえ実習生であるが故に`分からないことや自信がないことを職員に尋ねたり確認したい、という意識の狭間で葛藤する結果、「職員に関わるタイミングに戸惑い」を感じたり、「指示がない」中でどの範囲で動いて良いのかに困惑したりしているのではないかと推察された。

また、これまでに培われてきた自分なりの保育観や教育観があるからこそ、自分のそれと合わない「職員の子どもに対する関わりへの疑問や困惑」を感じ、「職員との価値観の違い」や「守秘の問題」、「教員と比しての自分のできなさ」といった点に困難感を持つのではないかと推察された。

今回の調査研究によって抽出された「職員対応困難感」の内容の多くは、学生達が保育・教育の専門職として成長してきており、自立に向かっているが故に持つ困難感なのではないかと考えられた。

（４）まとめ

今回の調査研究によって、児童教育を専攻する学生が実習において持つ「子ども」「保護者」「職員」への対応困難感の具体的な内容や、どの程度の学生がそのような困難を感じるのかということがある程度把握できた。

今後は、今回得られたような対応困難な場면을教材として、どのように対応していくと良いかということをロールプレイや心理劇といったアクションメソッドを用いて体験的に学習し、考える授業展開に繋げていければと考えている。

また、上述してきたように、実習において持つ困難感は、裏を返せば保育・教育の専門職としての基礎が出来てきたからこそ持つ困難感も多いと考えられる。しかしながら、そのような対応困難感によって過度に自信を失ってしまう危険性もあるのではないかと。

坪井（2015）によれば、保育者として将来仕事をしたいという希望者が入学時からデータを収集した2年生の10月中旬までの間に10%程度減少すること、また15%以上の学生が保育者としての自信をなくし、適正に疑問を持っていることを指摘している。その上で、必ずしも実習によって自信を失ったり、不適切な指導や子どもが嫌いになったことが保育職につきたくないという原因ではないことを示

唆している。

実習もあくまで学びの場であることを考えれば、ある程度の自信喪失やできなさへの直面といった経験は当然あるであろうし、それを乗り越えていくためのレジリエンスを育む機会としては必要な側面もあるだろう。そのような成長に繋げていくために、対応困難感を持つことが保育・教育の専門職として成長しているとも言えるということを折に触れて学生に伝えていくことが幼児教育の専門職を育成していく上では重要な支援の一つなのではないかと考える。

〈謝辞〉

アンケート調査にご協力いただいた学生の皆さまに心よりお礼申し上げます。

引用文献

- 一般社団法人保育教諭養成課程研究会（2017）文部科学省：幼児期教育内容等深化・充実調査研究委託幼稚園教諭の養成の在り方に関する調査研究 平成28年度幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究—幼稚園教諭の資質能力の視点から養成課程の質保証を考える—, pp4-5.
- 重橋のぞみ、岡嶋一郎（2006）対人援助職養成における心理劇の役割交換技法に関する研究：保育学生の自己・役割・人間関係に対する気づきを通して、福岡女学院大学紀要：臨床心理学, 3, pp39-46.
- 片山美香（2016）若手保育者が有する保護者支援の特徴に関する探索的研究：保育者養成校における教授内容の検討に生かすために、岡山大学教師教育開発センター紀要, 6, pp11-20.
- 厚生労働省雇用機会均等・児童家庭局保育課（2008）保育所保育指針解説書, pp12-13.
- 宮里新之介（2017）児童教育を専攻する短期大学生の実習における困難感の調査研究—保育士との比較を通して—, 鹿児島女子短期大学紀要, 52, pp145-152.
- 高橋真由美（2015）保育所における保護者支援研究の現代的課題, 藤女子大学 QOL 研究所紀要, 10, pp141-146.
- 坪井敏純（2015）幼稚園教育実習の実態とキャリア教育の検討, 鹿児島女子短期大学紀要, 50, pp67-76.

（2017年12月1日 受理）